

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B4講義室】

## 同じ話における共通語彙

加藤 祥

体験談やプレゼンテーションなど、同じ話を繰り返す機会は多い。また、小説や論文などにおいて同じであるということは、剽窃や盗用の問題となる場合がある。では、同じ話とは何がどの程度同じであれば同じ話なのか。共通語彙率の高さが特徴なのか。本稿は、同一人間・複数人間における同じ話と違う話、未完結文章（部分）の共通語彙率とその被覆率を調査した。300語程度で完結した文章（話：物語・説明作文）と、未完結文章（現代日本語書き言葉均衡コーパスからランダムに選んだサンプル・作家作品から抽出した同程度長の文章（部分：段落か文単位）の対照を行った。結果、同じ話の共通語彙率は2割以上となり、その被覆率も6割となった。これらの割合は、同一人間・複数人間ともに違う話における共通語彙率（平均6%）とその被覆率（平均45%）よりも高い。但し、完結した話は未完結文章よりも共通語彙率とその被覆率が下がり、物語性の影響が見られる。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B4講義室】

新聞記事における『発達障害』概念の批判的ディスコース分析

宮崎 康支

新聞記事における『発達障害』概念の形成にかかる社会的文脈を、新聞記事の批判的ディスコース分析(CDA)を通じて明らかにする。資料にはA新聞およびM新聞の電子データベースを用いた。医学的概念として知られた『発達障害』は、現代日本の行政においては主に自閉症スペクトラム障害および学習障害、注意欠陥多動性障害などを指す。本報告は批判的ディスコース分析によって言語学の観点からその概念形成の政治性を分析する。その際に、新聞記事における『発達障害』のディスコース(言説)は、新自由主義的思想の所在を背景として就労や『親亡き後の自立』に関連しているとの仮説を立てる。パイロットスタディにおいては、Y新聞における発達障害定義の形成が、関連法令の制定に影響を受けていることが示唆された。この点を踏まえ、A新聞およびM新聞のデータベースにおける『発達障害』の意味概念の形成について、社会的背景の分析を報告する。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B4講義室】

市民・行政協働事業におけるミーティングについての会話分析による研究  
—水戸市協働推進事業計画実施事業をフィールドとして—

澤 則子, 西澤 弘行

本研究は、水戸市協働推進事業のミーティングをフィールドとし、市民・行政間という価値観や立場の違うメンバーが協働で理解を示しあいながら目的を達成していく過程である参加者たちのミーティングのやり方をエスノメソドロジー／会話分析の方法を用いて記述したものである。

当該ミーティングは、明確な進行役が決まっていなくてもかかわらず、大きな滞りもなく進行し、その日の議事についての結論が出され終了する。それぞれの参加者は、議事進行に関する2種類の指向性(①議事の進行そのものに関する指向性、②議事の構造に関する指向性)を持ち、ミーティングを作り上げている。

また、当該ミーティングで複数回発生する会話の分裂は、参加者が自由に意見を述べ合える雰囲気を作り、ミーティングの目的の達成に対して効用を与えている。これには、先に述べた参加者それぞれが持つ議事の進行に関する2種類の指向性も大きく関連していると思われる。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B4講義室】

英語母語話者の言語生活と日本語の発音

平野 圭子

本発表は日本に住む英語母語話者同士による自然談話（英語）の言語コーパスに観察される日本語使用を話者の言語生活の観点から検証し、性や出身国などの社会的属性だけでは説明できない話者間に見られる言語行動の個人差の要因を探る。会話中に使用された日本語の語彙の発音方法を日本語的な発音か否かで分類し、来日直後から一年後にかけての変化を検証する。日本語的な発音使用率（平均値）は来日直後の**56%**から一年後**77%**に増加し、性、国籍、国籍×性のどの社会的属性で分類しても全て増加の傾向が見られる。一方増加率における個人差は「仕事以外で日本人と付き合う頻度」、「仕事以外で日本人と付き合う際の使用言語」、「日本での仕事の満足度」と強い相関関係のあることが判明した。言語行動に与える影響は社会的属性だけでなく、被験者個人の生活や言語使用の傾向を調査することでより詳細に説明できる可能性を提示する。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B5講義室】

対話者との親密度に応じた自己開示に関する日韓比較研究

柳 善美

本稿では、親密度が異なる3種の相手に対して特定の話題をどの程度自己開示できるかについてアンケート調査を用い、日韓間の比較を行った。研究課題として1) 対話者との親密度は話し手の自己開示度に影響を与えるか、2) 対話者との親密度による日韓の全体的な自己開示度や話題項目別の自己開示度は異なるかを設定し、SPSSを用いて統計処理を行った。その結果、1) 対話者との親密度は自己開示度に強く影響していることや、2) 日韓の全体的な自己開示度は同程度であることが確認された。更に、項目別の自己開示度は日韓の間で有意差があった話題より、有意差がない話題の方が多いことが明らかになった。本稿では、日韓間で親密度ごとに自己開示度が異なる話題や同程度である話題に関する情報を提供し、日韓の実際の自己開示のデータを比較する際に、親密度や話題の自己開示度が同程度にコントロールされている日韓のデータを比較の必要性を指摘する。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B5講義室】

## 児童による丁寧体使用の学年間比較

岡崎 渉, 吉村 瑞希, 永田 良太

日本語を母語としない児童が増加している昨今、日本語のロールモデルとしての児童の言語使用実態に関する情報は不足している。中でもスタイル（丁寧体／普通体）の適切な使い分けは、日本社会への適応に関わる重要な問題であろう。日本語話者によるスタイルの使い分けについては従来多くの調査がなされてきたが、子供による使用実態の知見には乏しい。そこで本研究では、児童のスタイルの使い分けを、対面型テストを実施する際の会話をデータに横断的に調査した。その結果、丁寧体の使用率は学年が上がるほど高くなっていくこと、児童は低学年であっても丁寧体をランダムに使っているわけではないこと、丁寧体の使用は上下関係よりも、社会的、公的にふるまっていることを指標する用法から用いられていくことがわかった。日本語を母語としない児童への適切な日本語指導、評価を行うために、本研究のような知見は今後より必要になるものと思われる。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B5講義室】

共在状況に生じる「活動」の境界  
—実習合宿における学習場面の観察から—

居關 友里子

本研究では、会話を活動の連続の中で捉え、特にその境界が参与者にどのように体験されているのかについて考察する。扱うのは、相互行為チャンネルが活動の境界をまたいで繋がれたままである、合宿形式で行われる実習授業の一場面である。この自習室に生じた活動の境界部分では、参与者が徐々に活動に対する参与を変化させながら、活動の切り替えに関する交渉を行っており、その交渉中の発話が、続いて生じる活動の第一発話として結果的に扱われるというやり取りが見られる。そして活動の終了は後続の活動を参照することを通して組織され、終了後には直前の活動が再開される可能性に志向した振る舞いが観察される。会話の開始や終結は、前後に生じる活動を相互に参照し合う中で形作られること、その境界部分は参与者に必ずしもリアルタイムにそう扱われているとは限らず、活動がしばらく進行、継続していく中で確定されていく性質のものがあるといえる。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B5講義室】

診療場面における医師の丁寧表現不使用に対する日本人患者と韓国人患者の意識比較

辛 昭静, 石崎 雅人

本研究は、多文化社会へ向けて安心な医療環境作りに必要なコミュニケーションスタイルを探るため、医師の丁寧表現不使用に対する日韓患者の評価を調べる質問紙調査を行った。医師が患者に「薬にアレルギーはないんだよね？」という丁寧表現を使用しない場面を設定し、医師の年代（60代/30代）、患者と医師の関係（親：いつも診てもらっている/疎：初めて診てもらおう）別に、計12項目を5段階で評価させた。

①肯定的な項目に関しては、日韓患者とも疎の関係の医師による丁寧表現不使用に対して厳しい評価を下していた。否定的な項目に関しては、日本人患者は疎の関係の医師に対する評価が厳しく、韓国人患者は若い医師に対する評価が厳しかった。

②日韓患者ともに、60代医師よりは30代医師、親の関係よりは疎の関係の医師に対して評価が厳しかった。相対的な年代関係に関わらず、日韓患者とも疎の関係の医師による丁寧表現不使用に対して厳しく評価していた。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B7講義室】

会話における引用はなぜ引用だとわかるのか

伊藤 翼斗

会話においては、話し手はしばしば過去の他者の発話などを実演する。いわゆる「引用」と呼ばれるものであるが、発話の中の「引用」に該当する部分と地の部分をどのように使い分けているのであろうか。本研究の目的は、この使い分けにどのような資源が用いられているのかについて会話分析を用いることで明らかにすることである。分析の結果、音調的な特徴づけ（平常時とは異なる発話の速度、音の高さ等）、「今ここ」に適さない「今ここを示す要素」（現場に無いものを指す現場指示等）、発話冒頭や発話末に用いられる言語要素の発話途中での使用、直前が引用を多用するという特定の環境（第三者の行動を時間軸に沿って発話を引用しながら説明するという状況等）といった様々な資源が用いられることが明らかになった。これらの資源の大半は、当該部分を引用であると確定させるものではなく、当該部分が引用である可能性を高めるものであると考える。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B7講義室】

仙台市の言語景観について  
—仙台市中心部のバス停留所を事例として—

平林 晴磨

仙台市の言語景観について（仙台市中心部のバス停留所を事例として）

今回の研究は、日本の地方都市・仙台市における言語景観の現状を考察・研究し、先行研究との相違点を示す試みである。言語景観自体、近年に入り盛んになってきた研究であり、街中にあふれておる広告・看板を考察することにより、送り手の意思や受け手の受容のあり方を調査する研究である。地方都市・仙台市においても国際化の進展が見られ、公的部分（行政）における外国語（とりわけ英語）の使用が観察でき、先行研究で見られるような東京の言語景観と同様に、言語の力関係における英語の圧倒的な高い地位は仙台市でも確認できる。また、民間部分（商業）の言語景観は、先行研究と同様に日本人の外国語（とくに英語）への好意的態度が確認できるとともに、地方都市においては依然として外国語の装飾性・装飾的使用の頻度が高いことが考えられる。

<<ポスター発表>> (9月6日 13:15-14:30)

【1号館B棟2F B7講義室】

日韓の自己と相手に抱くイメージとその形成要因  
—好感度を中心に—

金 庚芬, 崔 宰栄, 関崎 博紀, 姜 錫祐, 染 吉錫, 國生 和美, 金 志姫

本研究の目的は、日本と韓国の自己と相手認識という観点より、様々な世代の自国・自国民・自国語、及び相手国・国民・ことばに対する好感イメージの実態及びイメージ形成要因を明らかにすることである。日韓の幅広い世代を調査対象とし、イメージの詳細と好感度、関心分野、経験、情報源、インターネット利用などについてアンケート調査を行い2,936名のデータが得られた。分析結果、日本は、韓国の国と人への好感度が連動しているのに対し、韓国は、日本の国、人、ことばへの好感度に相違が見られ、また、互いの好感度へのイメージ推測も実際のイメージとの若干の乖離が確認された。なお、日韓ともに自国への好感度は非常に高い。好感イメージと、相手との接触、訪問、言語学習、関心分野、情報源、インターネット利用との関連性を見ると、いずれも、関連性が認められ、これらが日韓相互の好感イメージの形成に影響する要因であることが分かった。